

日本科学者会議 福井支部ニュース

第7号 2003年12月11日発行

- ** 日本科学者会議福井支部
- ** 〒910-8507 福井市文京3-9-1
- ** 福井大学工学部 小倉久和研究室 気付 Tel&Fax 0776-27-8582
- ** ogura@i.his.fukui-u.ac.jp
- ** 郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部
- ** ホームページ <http://www.jsa.gr.jp/fukui/> (本部のページ <http://www.jsa.gr.jp/> からたどれます)

今号の内容

- 会員の声 「企業の儲けと基礎研究」 (長谷川 健二)
- 支部機関誌「福井の科学者」92号の紹介 (山川 修)
- 大学からの通信「教育 COE に関して思うこと」 (森 透)
- 寄稿「UAE あれこれ その4 - 研究パートナー」 (永井 二郎)
- 「支部例会『まちづくりと小売商業施策のあり方』に参加して」 (坪川 武弘)

2004年度前期分の会費納入をお願いします。
2003年度後期および過去の会費滞納がある方
は、早急に納入をお願いします。

日本科学者会議は、11月30日、次の2つの声明を出しました。本部のホームページに掲載されています。

「自衛隊のイラク派兵に断固として反対する」

「石原都政の「大学改革」を厳しく批判し、強く抗議する」

また、次の電子署名への協力要請を出しました。

- ・東京都議会と横浜市議会への要請書電子署名 <http://poll.ac-net.org/1>
- ・京大再生研教授再任拒否事件について、京都地方裁判所第3民事部裁判官への大学界有志要望書の電子署名 <http://poll.ac-net.org/2>

支部ニュースへの寄稿・投稿を募集しています。意見・見解の表明、経験報告、事例紹介、行事案内、会員への案内、その他、会員の間での交流の場とするため、積極的な寄稿・投稿をお願いします。支部事務局まで、メールでお送り下さい。

福井大学退職後、在職中には一度も読んだことがなかった経済紙に、毎日、目を通しています。とくに、経済学の専門家が交代で解説している「やさしい経済学」シリーズなどを読んでいます。内容は決して「やさしい」ことはなく、どの程度まで書いていることを自分で理解しているのか、よく分かりません。たとえば、最近、社員の給料は会社によって、なぜ違いがあるのか？という疑問も経済学の立派なテーマであることを知り、意外でした。

この疑問に対する伝統的な説明が二つあり、その一つは、産業間の仕事の違いにあるとする学説とのことでした。初め、これは自明ではないか、と思いました。しかし、この学説は、いわゆる3K労働のように、労働環境が良好とはいえない仕事の報酬が低い水準に抑えられている現実を説明できない、という解説を読んで、考え込みました。

もう一つの説明は、市場での産業間の競争条件には違いがあり、企業の収益に差がでてくるからだ、という学説とのことでした。これも当然ではないか、と思いました。けれども、この学説にも、なぜ高い収益が高い報酬に結びつくのかが説明できない、という根強い批判があるらしく、これまた意外でした。

さらに、この疑問をめくり、近年のパート社員の増加と正社員との賃金格差増大も取り上げられ、その背景や今後の対策についても論じられていました。

ふと、宅急便の全国展開で成功した著名な経営者が、ある雑誌で、企業の方程式は [(売り上げ) - (費用) = (収益)] ただひとつ、と書いていたのを思い出します。ダイナマイトを発明したノーベルは基礎研究で成功した人物とは思えませんが、彼が創設したノーベル賞は基礎研究にも授与されています。長年、一国立大学の工学部で研究と教育に携わった者として、国立大学法人化について思いをめぐらすこの頃です。

支部機関誌「福井の科学者」92号の紹介

山川修（編集長）

先日お届けした支部機関誌「福井の科学者」92号は、2003年4月に福井大学で行なわれた北陸シンポジウム「自然エネルギーと環境問題」で報告された各氏に原稿をお願いした。

松尾氏にはシンポジウムで基調講演をお願いしたが、巻頭言で「Think Global, Act Local」の大切さを協調されている。

林氏は、市民がお金を出し合って太陽光発電所を設置する活動を福井で展開されているので、その活動の報告をお願いした。すでに2つの太陽光発電所ができ、現在3つ目の設置に取り掛かっているということである。

児玉氏には、石川県における自然エネルギー導入の状況について報告をお願いした。温暖化防止対策を講じた場合のいくつかのシナリオに従って二酸化炭素の排出量がどのように変化するかシミュレーションが興味深い。

森氏には自然エネルギーの特性を化学工業的アプローチで吟味していただいた。自然エネルギーは従来の化石燃料と比べると、エネルギー密度の面でも、安定性の面でも劣っていることが良く分かる。今後の自然エネルギー利用を進めるには、こういった特性を理解した上で、どのように現在のシステムに適合させていくかの議論が必要となるであろう。

対馬氏には、熱サイホン式雪発電という、雪を利用した独創的な発電技術について解説していただいた。雪に悩まされている北陸地方にとって、雪を利用して発電ができることの意義は限りなく大きい。

宮本氏には、夏地中に蓄えた地熱を利用して冬の融雪を行なう技術について解説していただいた。この技術は実験段階ではなく、すでに実際の道路や橋の融雪に利用されようとしていると知って編集子は驚いた。こういったシステムが各家庭でも利用できるようになると、さらに面白くなるように思う。

佐々治氏の投稿論文は、夜叉ヶ池に生息するヤシャゲンゴロウの発見のいきさつから現在の活動までをまとめたものである。1つの種の保全をするためには、環境全体の保全をしなければならないことが指摘されている。

福井大学 森 透

「特色ある大学教育支援プログラム(教育COE)」に、福井大学教育地域科学部で提出していたプロジェクト「地域と協働する実践的教員養成プロジェクト—ライフパートナー事業と探求ネットワークを中心に—」が採択された。全国の教員養成系で採択された事例は希有であることから、福井大学で進められている教員養成の実践研究は全国的にも注目を集めていることの現われといえる。そもそも、このCOEという教育政策は研究と教育それぞれの「優れた」事業への国家予算の重点配分という、ある意味で差別的・格差付けの意味を持つという問題点があることは充分認識することが必要である。その上で、大学の生き残りをかけた競争社会の中で、今回の採択は福井大学にとっては、戦略的には大きな意味を持つといわざるを得ないだろう。このプロジェクトには私も参加しているが、国や文部科学省も認めざるを得ないような活動内容のプロジェクトであるといえるからである。このプロジェクトには2つの柱がある。1つは不登校の子どもたちへの支援を学生が行うという「ライフパートナー事業」で、学部のカリキュラムにも位置づいている。もう一つは大学近辺の小・中学生と学生たちが7つのプロジェクトを長期にわたって展開する「探求ネットワーク」であり、これも学部のカリキュラムに位置づいている。私は後者のプロジェクトに参加しているが、今年度は学生100名以上、子どもたち200名以上という大規模になっている。活動の期間は5月から12月までの8ヶ月間で、人形劇・料理・紙すき・歴史探検・気球・デコボコ冒険・ふれあいフレンドクラブの7つのプロジェクトである。各プロジェクトごとに子どもたちを募集して、希望する子ども達と学生スタッフで、企画・運営していく。春・夏・秋の3つのサイクルを回しながら、探求的な活動を継続的に行っていくのである。

今年で9年目になる「探求ネットワーク」に最初から参加している私自身は、毎年いろいろな発見がある。学校という制約された場とは異なり、いろいろな学校の子どもたちが毎月2回(第2・第4土曜日の午前中)集まり、意欲的な探求的活動を行い、12月には集大成の「なかまつり」を企画・実行する。現在は、その集大成のイベントに向けての最終準備の忙しい時期である。毎晩のように遅くまで活動している学生も多い。学生たちに共通しているのは「子どもが好き」ということだろう。昨年度から始まった「ふれあいフレンドクラブ」は障害を持った子どもたちと学生とのプロジェクトである。試行錯誤の連続だが、学生たちは大きく成長しつつある。学生たちのエネルギーには敬服する毎日である。

大学で教育学を専門とする私は、このプロジェクトに参加することを通して、新たな教育実践研究の構想を描くことが課題となっている。(2003年11月6日)

独り言のコラム

「アイアンハンマー」と「レジスタンス」

ついに憂慮していたことが起こった。11月29日イラクで2名の日本の外交官が殺害されてしまった。2人の方のご冥福をお祈りする。しかし、後方において「テロに屈しない」と声高に叫ぶ小泉首相は、憲法もイラク特措法の目的も忘れ、ひたすらブッシュ米大統領に追従し、今度は文民の代わりに「軍人」を送ろうとしている。いくつかの大手のマスコミも「テロに屈するな」と論陣を張るし、石原都知事は「せん滅しろ」と氣勢を上げている。「テロ」といえば何でも主張できる雰囲気を作られつつある。

米軍は空爆を含む対テロ「アイアンハンマー」作戦をイラク全土で展開している。日本の外交官殺害の翌30日、バグダッドの北のサマラで大規模な戦闘があり、米軍発表では「54名の敵を殺害した」という報道があった。別の報道では、大部分は米軍の無差別銃撃でまきぞえになった民間人死者、とあった。真偽のほどは不明だが、ベトナム戦争時代の米軍の行動を思い出すと、どうも後者に近い状況ではなかったかと想像する。「アイアンハンマー」とは日本語なら「鉄槌」である。30年前の大学紛争のとき、過激派各派がアジビラに「一派に鉄槌を」「敵をせん滅する」などと書いていたのを思い出す。大変野蛮な響きのする、「ならず者」の使う言葉だ。「民主主義」を標榜する陣営の使う言葉ではないだろう。

イラクの警察署長が「ナチスの支配のもとでフランス人は幸福だったか。我々も同じだ。」といったとか。搜索と称して深夜住居に武装兵が乱入し、容疑者と称して拉致し、道路の封鎖・検問ばかりか空爆を繰り返すイラクでの人権の状況は、フセイン時代より悪いのではないか。これは「レジスタンス」を生む。ベトナムで米軍が「VCテロリスト」と呼んだ相手はレジスタンスであった。無差別に破壊した米軍の行動こそが「テロ」であったのだ。スペイン市民戦争ではレジスタンスがファシストに破れたが、多くのレジスタンス運動家が市民の手でかくまわれた。しかし、イラクでは事情がもっと複雑だ。占領軍がレジスタンスを作りだし、「本物のテロリスト」がそのレジスタンスを利用しているように見える。(2003/12/6 OG)

今回は、このコラムで数回登場したUAEでの研究パートナーであるM氏を紹介したいと思います。

M氏と福井大学研究チームが連携することになったいきさつは、福井大学建築建設工学科の福原先生が一番良くご存じて、私はあまり良く知りません。約8年ほど以前に、ある方の紹介で福原先生がお知り合いになったのだと聞きました。私がM氏と初めてお会いしたのは4年前の1999年夏のことです。その1で書きましたように、福井大学チームは現在、太陽熱淡水化&節水栽培システムの研究をUAEで行っていますが、現地で全面的に研究をバックアップしてくれているのがM氏です。M氏は、石油の無い貧しい時代のUAEを知っており、数十年先のUAEの将来を本当に心配し、その一環として私達の研究を支援してくれているわけです。ちなみに、元UAE農漁業省次官の方で、いくつかの会社を経営するビジネスマンでもあります。

こう書くと、「お金持ちのM氏が研究資金をポンと出してくれているわけか・・・」と思われる方が多いと思いますが、少々違います。M氏の「全面的なバックアップ」とは、もちろん、実験場所の提供や資材の購入といった金銭的な意味も少し含んでいるのですが、それよりも私達にとって何よりありがたいのは「心のこもったバックアップ」です。例を挙げてみますと、(1)暑い中、私達が農場で実験設備を組み立てていると、さりげなく冷たいジュースや麦わら帽子を持ってきてくれる、(2)日中の作業で疲れ果てた私達を夕食に招待していただき、自ら料理を分けてくれたり、飲み物を手配してくれる、(3)実験場所である農場内に、私達のために平屋建ての家を一軒建ててくれた(実験がスムーズに行われることを目的として)、(4)実験の突然のトラブル発生に対して、敏速に業者に連絡を取る等して対応してくれる、(5)入国審査の際に、大きな実験装置を持ち込む際にも、M氏が一筆書いてくれた紙(アラビア語なので内容不明)を出すと比較的スムーズに通過できる、(6)帰国の折には、毎回必ずおみやげをくれる、(7)顔の広い方なので、政財界および王室関係の方に私達の研究を紹介してくれる、等々です。ちなみに、M氏は首長国王から「アンタッチャブル」のお墨付きを頂いているそうです。つまり、(極論すれば)M氏が何をしようが逮捕されない(国王が許可している)、ということだそうです。恐れ入りました。

M氏の豪邸には、昨年個人博物館が完成しました。M氏がこれまで集めた様々な秘蔵コレクションを展示した物で、エジプトの大統領と会談している写真も飾ってあります。M氏は大変な親日家で、数十年前の新婚旅行先が日本であったそうです。たくさんの日本のものが飾られていました。このようなM氏と親しくお付き合いをさせて頂く幸運に恵まれたことを感謝している次第です。

支部例会 まちづくりと小売商業施策のあり方 に参加して

坪川 武弘(福井高専)

11月25日、福井県立大学で支部例会が開催されました。福井県立大学に今年度お見えになった小川雅人氏(地域経済研究所)による標題の講演およびそのあとの質疑応答に参加させていただきました。氏の講演では、最初に商業施策の歴史を振り返り、補助金による商業振興策やハード優先の整備事業、競争時代における商店街について、施策の限界と今日の問題点を指摘されました。大型店の進出により、通行者が1日あたり3000人から600人に激減してしまった香川県観音寺市の商店街や、逆に集人効果があった都心の新宿などの例を引き合いに出されました。次に、今後の小売業の方向性とまちづくりの課題について述べられました。現在のきびしい経済状態の中でも立派に経営し儲けている商店の例、「一店逸品運動」「生鮮びっくり市」など活性化している商店街についての例などいくつか希望のもてる事例を紹介していただきました。今後は、個性的でいい店があり必要なものがそろい、やる気のあるリーダーが活躍している商店街が、必ず存続し発展していくことを強調されていました。そのための商業人を育成する上で行政のなすべき仕事や、地域社会で商店街が果たす役割など興味深い論点が示されました。

福井県内には97の商店街(27店平均)があるとのことでした。講演後の質疑のなかで、参加者から福井県の現状についての疑問や意見が多々だされました。討論を通じて、商業施策やまちづくりについての基本方針が福井では十分検討されていないのではないかという感想を、私は抱きました。また、地域を活性化させる上で、意欲的な小売業者を有する魅力的な商店街の育成と発展は不可欠であるという思いを強くしました。議論は尽きませんでした。まちづくりに関係する話題は多くの人に関心をもっており、引き続き討論と研究をしていく必要があると思います。

小川先生の豊富な具体例と斬新な視点をお聞きしながら、本屋のSさん、酒屋のKさん、和食のTさんと、お店にお客の絶えない様子を思い浮かべていました。彼らの本当に地道な努力は、これからの経営者の姿なのですね。